
Heaven's nightmare

喜怒 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H e a v e n ' s n i g h t m a r e

【Nコード】

N 9 1 2 4 0

【作者名】

喜怒 泉

【あらすじ】

突然変異で生まれた特異の双子。

その二人がどうやって生きていき、

どこへ行くのか…。

なにをするのか。

邪悪が生まれる時、神の鐘は鳴る。

昔…人間が？神？と言う存在を知らなかった時代。

？神？と？死神？はお互い対立していた。

？神？は、人間の少しばかりの努力を代償に

幸福を与えていた。

しかし、？死神？は人間を弄び、殺していた。

ある日、？神？は？死神？に言った。

【人間を殺してどうする？無闇に人間を殺すな。】

？死神？はある条件をもとに、言うことを聞いた。

それは…

《神の領地に死神の領地を作れ》

？神？はそれを最初は拒んだ。それに、領地を

こちらに作ると言うことは、？死神？の領地にも

均衡を保つため、神の領地を作ることになるからだ。

？神？訝しげに思いながら、それを承諾した。

それ以来、？死神？が人を殺すことはなく、

死者を黄泉の国まで送る仕事をこなしていた。

そして、世界に平和が訪れた——はずだった。

ある双子が、生まれてくるまでは……。

今——神の鐘が鳴る。

邪悪が生まれる時、神の鐘は鳴る。（後書き）

フフフフフフ。また連載を始めてしまった。

呪われた双子は初めて街を訪れる

「うわゝすごいねえ、人間の街って。」

ネオは透き通るような金の瞳でじつくりと辺りを見渡す。

「ええ、そうですね。とても活気づいていて。初めての街が、

こんなに素晴らしいとは。異界とは大違いです。」

ネオとそっくりの瞳で、ノアも辺りを珍しそうに見渡す。

二人は黒い長いフードローブを着ており、どちらも頭と背中に

不自然な曲線の膨らみがある。フードからは――ノアは

長い深緑色の髪がのぞいている――ネオは短く。

背丈、目・髪の色、ともに映し合わせたようにそっくりだが、

髪の長さはノアの方が恐ろしく長く、肌の色は

ネオは浅黒く、それと対照的にノアは透き通るように白い。

「なあ、ノア。こんな綺麗で活気づいてる街に？希望？なんてあるの？」

周りをじっくり見すぎて、足元の小石に気付かずこけかけたノアに聞いた。

「…ありますよ。ちゃんと。…美味しくて、儚くて、消え入りそうなの、

でも強い、？希望？が。」

ノアは、立ち止まり、ある方向を見たまま言った。

ネオがその視線を辿ると、そこには路地があり、人生に絶望しながらも、

眼にはまだ微かな？希望？の光を湛えていた。

二人の双眸がキツと吊り上り、口を薄く横に開いた。

笑ったのだ。その面持は

のようであった。

——肉食獣が獲物を定めた時

呪われた双子は初めて街を訪れる（後書き）

えへ、怖いお二人さん。

そして、お気の毒な、今回の獲物さん……（フフフフ）

双子は初めて？希望？を食べる。（前書き）

獲物を見定めたネオとノア。

これから、どうなる。

双子は初めて？希望？を食べる。

辺りがすっかり暗くなったころ。通りには誰もいない。

ただ、路地にいる者たちとそれに近づく二人を除いては。

「さて、どれから、喰おうか。」

ネオは路地に座り込んでいる者たちを、一瞥しながらノアに聞いた。
すでにノアは一人の男を掴んでいる。男の額に自分の額を当てた。

ノアはカッと眼を見開いた。しかし、その眼はどこも見えていない。

いや——見ていた——男の記憶を。

.....

やがてノアは額を離すと男の額に手をつ込んだ。

だが、男が血を噴いて死ぬことはなかった。ノアの手は、

男の頭を突き抜けていなかった。ノアはゆっくりと腕を引き抜いた。

その手には、黄金に輝く輪郭のあまりはつきりしない、丸いものがあった。

丸い物からは、太い糸が男の額に続いていた。

ノアはそれを背中に背負っていた——あの不自然な膨らみ——

――鎌で断ち切った。

「へえ。それが、人間の？希望？？　綺麗だね」

ネオはノアの持っている？希望？を見た。ノアは？希望？をほんの一口食べた。

「…お、美味しい。とても美味しいです。」

「僕も早く食べたいなあ。」

そう言いながら、ネオは傍にいる女から？希望？を抜き取る。

自分もまた、？希望？を一口食べる。

「ん、ホント美味しい。やっぱり消え入りそうな？希望？が一番美味しいみたいだね」

二人は残りの？希望？を一瞥すると、顔を見合わせコックリ頷いた。

そして、全ての？希望？を貪り始めた。

双子は初めて？希望？を食べる。（後書き）

んゝ、まだ訳分からなくていいですよ。

分からない方が今はまだ美味しいとおもいますよ？オレとしては。

双子の腹が満ちた時、？闇？は目覚める

「さて、残り一人だね。」

ネオは一人の人間の髪を掴んで言った。

そして、「いる？」とでも言うように首を傾げて、人間を差し出す。

ノアは首を振って、断った。

「じゃあ、僕、食べるよ？」

ネオの言葉にノアは黙って頷いた。

—— 何かがおかしい…。

ノアは眉間に皺を寄せた。

—— ？希望？を食べ始めたあたりから、何かがおかしい。
しい。

？希望？を食べる度、何か近づいて来ている。

横では、ネオが？希望？を口に運んでいる。

？ダメ！ 食べてはダメ！ 腹を満たしてはいけない！？

「！」

ノアの頭の中に誰かの声が響いた。ノアは何故かその言葉を即座に信じた。

「ネオ、それを食べては…！」

いけない、と最後までいうことは出来なかった。

？何か？がノアの喉笛を貫いたからだ。

「がつ………！」

ノアは口から血をゴボリと出し、倒れた…と、思いきや、

途端に跳ね起き、自分の喉笛を貫いた者から、距離をとった。

喉笛の傷はみるみるうちに、治癒していく。

「ほう…やはり、こんなことでは死なんか。やはり、呪われた子よの…」

二人の前方に黒い影が立っている。どうやら、声からして女のようなのだ。

ノアは喉笛を摩った。

——ちっ……治りが遅い……。

「ゴホッゴホッ…！」

血を吐きだすノア。ネオは真っ直ぐ女を見据えている。

「ネオ…あの方の持つてる武器…たぶん、？神器？でしょうね。」

？神器？——読んで字の如く神の宝器。

「あれは、私達、呪われた者にとっては分が悪いです。ここは…」

「なに？ 逃げるとでも言うの？」

ノアはハツとして、ネオの顔を見た。そこには、憎悪に満ちた笑顔があった。

「フフ…まさか、そんなわけないでしょう？ …殺しましょうか。」

ノアの顔にも、また、憎悪の笑みが浮かんでいた。

呪われた子だ！！ 殺せ！ 生かしておいてはならん

死ね 死んでよ 生きててもしょうがないでしょう？

生まれてこなければ…！ お前達のせいだ…！ 殺してやる

二人の頭の中に数多の声が響く。

自分たちの存在を——居場所も、自由も、親も、幸福も、

全てを奪い去った、天界の民。

女が二人目がけて、神器を振り落した。

激しい音と叫びが辺りに響き、静寂が訪れた。

双子の腹が満ちた時、？闇？は目覚める（後書き）

やったー！！ やつと書きたいところ書けた。

Welcome to the reference room of he

ようこそ、天界の資料室へ。

ここでは、天界・人界・地獄に関する、全ての情報を保管しています。

次の物語へ行く前に、あの双子の過去をお話ししましょうか。

僭越ながら、この天界資料室の館長を務めさせていただく、

わたくしめが、お話させていただきます。

私のことは、そうですね……ミネルゲ……でもお呼びください。

さて、そろそろ始めましょうか。

そう、ネオとノアの、あの忌まわしき過去を――
――

あれは、そう、死神の殺戮が収まってきた頃でした。

ある？神？と？死神？が恋に落ちてしまったんです。

普通、？神？と？死神？の間に、子が生まれてくることはないのですが、

どういう訳か、生まれてしまったのです。しかも、双子だったので

す。
周りの？神？と？死神？は、即刻双子を生んだ二人を処刑しました。

そして、双子をも殺そうとしました。

しかし、誰一人として、双子を殺すことはできませんでした。

何度急所を突いても、死なないのです。

「こ、この化け物め、いくら神とて、？神器？で刺されれば、死ぬというのに。」

？神？の中でも最高位の神は、人界に双子を落とすことにしたので

す。
とはいえ、世界の均衡を保つために、場所を選ぶことにしたんです。

まあ、場所が決まるまで独房に入れられたんですが、

これがまた、驚くことが起きてしまったんですね。

しばらく経って、場所も決まって、双子を人界へ落とす準備が整って、

独房へと双子を迎えに行っ たんです。

しかし、そこにいたのは、赤ん坊ではなく、十三歳ほどの双子がいたのです。

なぜか、急激に成長してしまった二人は、すぐに人界へおとされ たんです。

…さて、これで、二人の過去のお話はおしまいです。

おや、…人界で双子と女の方の決着がついたようです。

フフ…それでは―― G r e e t i n g s , a n o

t h e r t i m e

W e l c o m e t o t h e r e f e r e n c e r o o m o f h e

えっと、これでだいたいわかっていただけたでしょうか？

呪われた双子はその場を立ち去る

「ハアッ…ハアッ…。し、死ぬかと、思いました。」

ノアのその端正な顔には血化粧が施されている。

「プヒヒヒ。うん、つかれたよ。」

ネオはしかめっ面をした。

「ああ…血で汚れてしまった。」

建物のガラスに映った自分を見て、ため息をつく。

ネオはその様子を見て、辺りをきょろきょろと見渡した。

そして…

ガッシャーン！！！！

「！？」

ノアはサッとネオの方を見た瞬間、几帳面な彼女にとっては、
卒倒しそうになるほどのことをしていた。

「ネ、ネオ！ あ、ああ、あなたは何をしているのです！！

店の窓を素手ぶち破るなんて！！ ? 神器?の影響で回復力も劣っ

て…むぐ!？」

ノアは何かを顔に押し付けられた。

「むう…ぷはっ!」

なんとかして、ノアはそれをはぎ取った。

「ほら、それで顔拭きなよ。」

それは、タオルだった。

ノアは一瞬ポカンとなったが、にっこり微笑んで、ネオの言うとおりにした。

?…逃げて!! そこから…!…刻も、早く…! 奴等が…? 神の囚人? が来る!!? ?

— また…? 次は、何が起きるといつの?

ノアは不審に思いながらも、ネオにここから立ち去ろうと話を打ちかけようとした。

「…? どうかしましたか? ネオ。」

そうノアが聞いたのは、ネオの様子がいつもと違ったからだ。

「あ、あのさ、さつきから声が聞こえるんだ。あの女と戦う前も…。」

「

「あ、私も聞きました！ たぶん、貴方と同じタイミングで…。」

「え…？ ホント？ じゃあ、今のも…？ 神の囚人？ っても…。」

二人は、自分たちが同じ？ 声？ を聞いていたことを知った。

「…逃げましょう。」

「…逃げようか。」

同じようなことを、同じタイミングで言った。

双眸の瞳は、ある感情に燃え盛っていた。

怒り——そして悲しみ…。

相反する二つの感情。

「さあ、行きましょう。」

ノアの言葉にネオは、不承不承に頷いた。

夜の街を双子は歩く。

力を——希望を——求め。

呪われた双子はその場を立ち去る（後書き）

すごい!!! 777文字で終わった！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124o/>

Heaven's nightmare

2011年10月7日02時39分発行